

特115

705

宮井鐘次郎述

共存共樂主義大意

第壹篇

神風會出版部

9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

始



427115  
705

# 第壹篇 目次

## 序 文

- 一、貧富の反目と社會惡の發生…………… 四
- 二、今の社會の仕組…………… 一〇
- 三、改造の原理としての共存共樂主義と其の三大綱領…………… 一四
  - イ、労働の神聖と労働の義務…………… 一六
  - ロ、人は各々其の能力に應じて労働を分擔す…………… 二五
  - ハ、各人は相互に共存を保證す…………… 二五
  - ニ、各人は其必要に應じて共樂す…………… 二六
- (1) 反動思想か、改革思想か…………… 二六
- (2) 共存共樂主義と共產主義との差異…………… 二七

正六  
本三  
二五  
14. 11. 17  
内交

イ、日本主義と外來思想……………三〇

ロ、精神主義と物質主義……………四〇

ハ、國家に對する態度の相異……………四〇

ニ、義務中心と權利中心……………四六

(3) 共存共榮其の他の流行語に就て……………四六

一、貴族の退却と社會惡の發主……………四六

二、今の社會の井路……………四六

三、道義の風潮と「共存共樂主義」其の三大階層……………四六

英文

第一篇 目次

共存共樂主義大意

はしがき

この四五年來、「改造」といふ言葉が流行り出した猫も杓子もといつては甚だ失禮だが、耶蘇も坊主も學者も政治家も皆一様に此の流行性「改造熱」に浮かされてゐる。其の傳染力は實に素晴らしい。丁度、若い婦人達が、耳蔽や斷髮に無意味な新奇を競ひ、オベラパツクやバラソルの華麗に、輕薄な世紀末的流行を追ふ様に、人々はめまぐるしい「改造」の論議に魅惑されてゐる。

改造の叫びは人間を新人と舊人とに分類した。そして、無數の新人は「改造」の戦線に「第一維新」の雄叫びを擧げてゐる。かくて「改造」の叫びは、天下津々浦々に充ちた。が、それはあだかも、皐月の闇の時鳥の如うに、聲はすれども、一向に姿を見

せない。そこで大衆は、漸く動搖し出した。無智の民衆は、闇を通して聞ゆる「改造」の美しい聲に魅惑されて、終に臙臙たるその姿に眩想しいよいよ深く闇の中に迷ひ込んだ。そして彼等は益々熱病患者の病症を發現する。熱にうかされては様々な戯言を言ふかと思へば奇態な妖怪を幻想して狂ひ出す。現代は實に「改造の時代」であると同時に「妖怪變化の横行時代」でもある。

「一個の怪物歐洲を徘徊す共產主義の妖怪これなり」とは社會主義の父マルクスの言つたことだ。然り、現代の思想界は怪物共產主義を始め、無政府主義、日蓮主義「死線を越へて」から新らしい村へ、親鸞から慈善鍋に至るまで、走馬燈の如く幻滅する妖怪變化、擬物賸物の出沒と、これを操る赤白色とりどりの興業師と其の率ゐるオーケストラに百花爛熳の賑を呈して居る、と同時に社會はいよいよ險惡な世相を現はして來

た。資本家と労働者、地主と小作人貴族と平民との間には流血の争が繰返されてゐる。切り取り強盜、詐偽横領、自殺心中など、新聞紙に寫された現代の所謂文化生活は決して安全に保證された平和では絶對にない。

現代の社會は名醫の診断を乞ふまでもなく、瀕死の重態に陥つてゐることは素人も明白である。それは緊急の手術と施療を必要とする重症である。私も勇敢な改造論者である。服薬を投じて効顯がなければ外科手術をも決して辭せない覺悟をもつてゐる。

だが、投薬の前には慎重な珍察を怠つてはならない。多くの改造論は此の珍察に注意をかいいてゐる。日本の改造は日本自身の歴史と體制を充分に究めた上に、始めて投薬するかメスをとるべきかが決定されるのだ。

此の大病人をとりかこんで多くの似せ醫者が横行してゐる。彼等の堂々たる言論と文章とは病者にうめく民衆をひきつけるに充分であつた。しかし、一度東天紅くして共存共樂主義の大義が輝いたなら朝日にとける白雪の如く有像無像の妖怪變化はたちまちに馬脚を現はして退散するにきまつてゐる。

私はこの大信念をもつて共存共樂主義の大義を宣明し、暗愴たる思想界に一大巨火をかゝげ、天下の民生と協力一致して當面する社會的危機の打開に當らんと願ふのである。

#### 一、貧富の反目と社會惡の發生

人間は古來社會的動物だと云はれてゐる。にも拘らず、其の人間の社會が、どうしてかう物騒になつたか。

人間は麗しい平和と純愛によつて結合される代りに、愚かな衝突と慘忍な職によ

つて、幾つにも分裂してゐる。口は善い、心は惡い、社會的動物といふ名に恥ぢない。

貴族と平民は永い間、戦を續けた。資本家と労働者、地主と農民は事毎に流血の闘争をやつてゐる。現代の社會はいまわしい反目と衝突をもつて充された。そこには相互扶助も社會秩序も全く怠れられた如くに醜惡な事件のみが頻發する。

道徳の權威も法律の尊嚴もない昨今の社會的頹廢は、一體どうして發生したのであらう。

私は先づ現代の社會不安の原因について答へなければならぬ。

人間は決して、社會生活の當初から今日の如うな不安と暗闘をつゞけて來たものではない。

吾々の遠い祖先は、皇祖天照皇大神を中心に、各人皆なその能力に應じて勞働を共にし、消費を共樂して純愛と平和の生活をしてゐたことは古代の史實に明かな所である。

天照皇大神は御身自から蠶を養ひ糸を引き機を織り稻を作つて生産の事にあたり、富めばその富を民と共にし貧しき時は共に其の慮を分つた。

そこには一人の労働を厭ふものもなく労働の神聖は完全に實行されてゐた。一國はあだかも一家の如くに相互扶助の社會生活が完全に維持されたのである。

今日尙、正月の元旦には、君臣上下の別なく雑煮にゴマメに數子に屠蘇で祝盃を擧げ、又、神社の饌物を下げて氏子一般が上下の差別なく千本ヅキと稱して會食する直會の習慣の如きは、共存、樂の美風を今日に傳へたものに外ならない。

かように我が建國の昔には、天地自然の差別の外に、職に貴賤なく階級の反目、貧富の隔もなく、共存共樂の社會生活が營まれてゐたのである。従つて當時の人々には、社會的に何の不平も何んの憎しみもなく、何等の暗闘なく不言實行であつたことは言ふまでもない。

所が人間の智慧が進み、人口が増加して、社會的關係が複雑になるに従つて、此

の建國當初の生活の原則が破られた。人間は智識の發達と共に進化した、が又一面に大きな墮落を伴つた。いろいろな進歩した農具や器械の發明は人間にその生活の必要以上の衣食住を産ることを教へた。

此の豊富な生活の餘裕が人間に富の鬭争を教へ、共存共樂の生活原理を破らしたのである。すでに富の分配について争が起つた以上、當然に弱肉強食の傷ましい傾向が生れた。そして、強者はその富を一身に集積して、衣食住の費を盡し、労働を迴避した。

多數の貧乏人が出來た、そしてこれらの貧しきものは自然の饗宴に加はる資格を奪はれた。そして只富者の爲めに過酷な労働を強制されることになつた。それは言ふまでもなく労働の神聖を破るものに外ならない。共存共樂の社會は過去の憧憬となつて終つた。

かくて人間の社會は、貧富の大きな二つの階級に分裂したのである。  
近代的社會不安、社會惡の凡ては直接に間接に此の貧富の反目に原因しないものは  
一つもないと言つても決して過言ではない。

## 二、今の社會の仕組

共存 共樂の平和な社會は富の爭奪によつて破られた。貧富の溝渠は人間を相反目  
する二つの群に分裂した。親から相續した莫大な財産を擁して一生勞働を知らずに暮  
してゐる人間が出来た。と一方には親から相續したものは、その肉體だけで勞働を唯  
一の賣物としても暮のたらない貧乏人がある。一人が廣大な土地を所有するのに他の  
一人は自分の墓を築くだけの土地も所有つてゐない。山野に住む動物でさへ各々其の  
休息所とかくれ家をもつてゐるのに、空氣と光線の外に自分のものをもたない多數の  
貧乏人が出来た。

農民は炎天にさらされながら種をまき、酷暑に輝りつけられながら草をかりて秋  
の收穫をまつた。がその粒々辛苦の結晶は秋になれば地主の米倉に運び込まれて終ふ。  
彼等はいかに働いても貧乏に追いつかれるのだ。といつて彼等も生きて行かねばなら  
ぬ。

そこに小作爭議が起されるのである。  
勞働者は、金持の爲めに家を作つた。織物を織つた。しかし彼等勞働者には家もな  
く住所もなく、繻縷をまつた妻子をつれて流浪の生活をつづけなければならぬ。  
その悲惨な生活さへも何時行き詰まるか解らない。  
不景氣がやつて来る。

倉庫には衣食住の資料が山の如くに積れて、ある又社會の多數の人間が衣食住を要  
求してゐるにも拘らず資本家は機械を休ませ工場を縮少し、勞働者を解雇する。  
こうして現代の社會は、幾十萬といふ失業者をもてあましてゐるのだ。

此の生活の恐威と不安、これが労働争議を造る唯一の原因である。資本主義の社会は偉大な富の生産力をもつてゐる。しかしその生産器械は共存共楽のレールの上に運轉されてゐない。それは資本家と地主の、享樂の獨占の爲めにのみ動いてゐる。

古人も言つた、『衣食足つて禮節を知る』とこれこそ今日の社会的不安を説明する唯一の名句ではないか。

吾々は現代社会の險惡なる世相に當面して、徒らに社会秩序の頹廢を慮れ、世道人心の惡化を慨歎する前に先づその發生の過程に就いて深く思を潜めねばならぬ。

### 三、改造の原理としての共存共樂主義と其の三大綱領

吾々は既に社会的不安の原因が貧富の反目にあることを知つた。

而かも其の貧富の反目が、現代社会の個人主義的生産組織によつてつくり出されて

ゐることも知つた。とすれば、凡ての社会的不安を一掃し、凡ての社会的罪惡を矯正するには、貧富の協調緩和の爲めに現社会の制度に、大改造を加へなければならぬことは明かである。

これで現代社会の改造の必要と改造の設計とは明白にされた。そこで吾々の考慮は當然に次の二つの問題に向けられなければならない。

即ち改造の實行を指導して、眞の光明とする指針となる可き改造の原理と方策の研究である。

餘りに過酷な生活の恐威は、多くの貧乏人をつつて改造熱の患者たらしめた。熱にうかされた労働者や農民は様々な妖怪變化に、うなされてゐる。下手な手品師の様に自分で出した妖怪の始末がつけられないで、益々狂態を演じてゐるのが現今の改造運動の實情である。

彼等は學者よりも思想家よりも一番早く改造の必要を痛感しその設計も立てた。し



かし彼等はこれを指導する改造の原理と方策を發見することが出來ずに左顧右盼してゐた。

そこにイカサマな賣藥賣や舶來のニセドクトルが好妙な宣傳と廣告をもつてつめよせた。

溺るゝものは一本の藁にもすがる例にもれず、共產主義を信じ無政府主義を嚆矢にしたのである。

禍は勞農露西亞の宣傳でもない。微々たる社會主義者の活動でもない。汝自身の不健康とこれを救ふ可き祖先傳來の靈藥の存在を知らなかつたことにあ

る。私は卒直に日本改造の原理は皇祖建國の體制たる共存共樂主義の實現にあることを斷言する。

而かも皇祖天照皇大神の大理想は獨り新生の日本を指導する原理たるのみならず、

全世界を教化する光明である。

共存共樂主義とは、社會の各員が、勞働の神聖を信條とし、各人の能力に應じて社會的勞働を分擔し、相互にその共存を保證し、各人の必要に應じて消費を共樂する世界的皇國の建設にある。

即ち次の四ヶ條の信條に分解することが出来る。

一、勞働は神聖なり、人は働きて食ふべきもの。

二、各人の能力に應じて勞働すること。

三、相互に共存を保證すること。

四、人はその必要に應じて共樂すること。

今日の社會に共存共樂主義の生活を實現してゐるものは家族生活である。家族は家長によつて統制され、老若男女の家族は各々其の能力に應じて勞働し相互の共存を保證し勞働の優劣に拘らず各自その必要に應じて消費を共樂してゐることは

何人にも理解の行くことである。

これ我が家族制度の美風であり共存共樂主義の原型であつて、我が皇祖天照皇大神の建國の理想に外ならぬのである。

皇祖天照皇大神は實に御自身から共存共樂主義を實踐躬行して社會道義の典型を明示された。

即ち親から殖産工業より五穀を栽培して勞働の神聖を教へ給ひ、生産を重じて衣食住の主神なる豊受大神（外宮）を先に祭られるなど、五穀の豊穰を祈念する祈年祭新嘗祭等の祭式に見ても如何に農民と共樂を共にせられしか御神慮の程が偲ばれるのである。

この共存共樂の大義こそ我が歴代皇室の民本政治の根本精神である。此の皇祖建國の大精神こそ日本改造の原理たるべき唯一絶対の眞理であり、資本家も地主も、勞働者も農民も、此の大眞理の前に虚心冷靜に自己の生活を反省し、當面

する社會的危機の打開に協力一致しなければならぬ。

私は前章に於いて、共存共樂主義を定義して次のやうに言つた。

「共存共樂主義とは、社會の各員が勞働の神聖を生活の信條とし各々其の能力に應じて社會的勞働の義務を負ひ、相互に共存を保證し、各々其の必要に應じて消費を共樂する世界皇國への指導原理である」と。

而して此の共存共樂の大義は獨り日本改造の原理であるのみならず、世界の全人類をして純愛の光に充つる單一の共同生活に統一せしめようとする皇祖建國の大理想であつて「青雲のたなびく極み白雲の階居向伏す限り」如何なる國家と國民に施しても悖らざる大眞理であることを述べた。

即ち資本家にも勞働者にも、日本人にも露西亞人にも、人間生活の共通眞理として首肯されるものは、我が共存共樂主義を除て他にこれを求めることは出来ない。

私は次に共存共樂主義の思想内容に就いて、個々の解説を加へ妖怪變化の如き臆

庸思想に比較して、如何に人間味に富める教理であるかを明かにするであらう。

### 1. 労働の神聖と労働の義務

共存 共樂主義の根本精神は、「労働は神聖なり、人は働きて食ふべきものなり」といふ社會生活の信條にある。

「労働神聖」といふことは、何の疑ひもなく現代人の常套語になつてゐる。それだけ現代人は此の言葉に對して實際的責任を感じなければならぬ筈なのに事實は全くこれに反してゐる。現代程労働を卑下し労働を回避する時代はない。

「働かざるものは食ふ可からず」といふ言葉も、決して新しい造語ではない。

「一日なさざれば一日食はず」とは人口に膾炙された古來の諺ではないか。それにも拘らず、現代人は働かずして食らひ、衣食足れば安逸を求めて労働を避けやうとする。現代程、働かずして食らひ、働かずして富んで辱とせざる時代はあるまい。社會

の實際を見るのに働かぬもの程よりよく食つてゐるではないか。

それかと思へば骨を粉にして終日働きながら食ふことの出来ない貧乏人がある。一方には何等の労働もすることなしに、私利私慾に没頭してゐる強慾な資本家があるかと思へば、出来るだけサボツて出来るだけ多くの報酬をせしめようと苦心してゐる労働者がある。

かくの如く現代社會は、資本家も労働者も、利己的逸樂の追求に墮落した。そこには労働神聖の片鱗をさへ見ることが出来ない、「一日なさざれば一日食はず」といふ崇高な社會的道義は其の面影をさへ止めてはゐない。

實に現代は労働を卑下し、労働の社會的義務を避んとする時代である。此の「労働回避」の頻發的心理こそ、現代社會を虚偽と私慾と怠墮と暗闘の世界に墮落せしめた原因である。

抑も人間は食はんが爲めに働いてゐるのではない。働かんが爲めに食ふのである。

人間を下等動物と區別する主要なるもの、一つは、實に此の食ふことを超越して人間が人間に對して勞働の神聖なる義務を自覺することにある。

若しも人間が終日を食ふことにのみ追ひまわされてゐたならば、または衣食足つて勞働の神聖を忘れその社會的義務を回避したならば、人類は他の動物と區別される何等の文明を創ることが出来なかつたであらう。

人は人類の總體的進歩の爲めに必要な社會的勞働を分擔し、各々其の能力に應じて勞働の義務を遂行することによつて初めて食ふことが許されたのである。即ち此の社會的勞働の義務を履行することによつて人間は社會的生存の權利を與へられたのである。實に人類の進歩は、専ら此の『勞働の神聖』と『勞働の義務』の實踐躬行にかかつてゐるものと言はなければならぬ。

然るに現代人は富めるものも貧しきものも勞働の神聖を無視し、勞働の義務を回避しようとする。資本家も勞働者も、自己の働かざるに對して利己的權利のみを要求しそれ

が社會的必要に對する共同の義務である本來の性質を全く忘れてゐる。

勞働者は決して資本家の爲めに勞働に従事するのではない。印刷工も時計工も鐵工も鑛夫も百姓も皆な各人の能力に應じて社會的必要を充す爲めに社會的勞働の一部分を分擔してゐるのである。

勞働者は社會といふ大家族の生活と繁榮の爲めに其の家族の一員として神聖なる勞働の義務を遂行するものであつて、決して一部の資本家や地主の懷中を肥やす爲めに働いてゐるのではない。

それは資本家の場合に於いても全く同様である。即ち彼等が紡績工場を經營するのは、衣服といふ社會的必要を生産するが爲めであつて彼等自身の利己的打算によつて計畫されることは既に大きな誤りである。

資本家は工場を興し資本を投ずることによつて、その身に應じた社會的勞働の義務を遂行してゐるのである。

凡ての生産事業は社會的必要の爲めに社會的勞働の義務によつて運轉されなければならぬのである。かくの如き勞働義務の履行者として、資本家も勞働者も共に社會的生存の權利が與へらるのである。然るに彼等は勞働について此の社會的義務の觀念を全く忘却してゐる。

資本家の生産事業に於ける凡ての行動は、彼自身の利己的打算によつて或は必要以外のものを造り或は必要品の製造も之を停止する而して其の利益を壟斷して勞働者の生存の權利を恐威してゐるのが現状である。

此の暴慢なる利益の壟斷に對する勞働者の抗議と權利の要求は堂々たる社會的正義である。が勞働者は、此の權利の要求にあつて勞働の社會的義務の觀念を忘れてはならぬ。

彼等の勞働は彼等が負ふ所の社會的義務の履行であるが故に、彼に生存の權利を保證したのである従つて資本家に對する權利の主張にあつて、此の義務の觀念を無視

し、生産を破壊し、社會共同の公益を亂すが如きはまさに勞働者の横暴であると言はなければならぬ。

現代の生産組織はその根底に於いて、社會的義務の觀念を無視してゐる。従つて資本家も勞働者も各自の利己的權利を主張して争闘してゐるのである。

吾々は先づ第一に生産の組織を社會的基礎の上に改造しなければならぬと同時に『勞働の神聖と勞働の義務』をして眞に人間の社會的生活に於ける信條たらしめ『人は働きて食ふべきもの』といふ崇高なる道義の徹底に最善の努力を盡さなければならぬ。

即ち個人的權利の時代から社會的義務の時代への改造によつて人類はよりはるかに豊かな文明の世界に進化するであらう。勞働を避くる時代から、勞働を歡ぶ時代への改造によつて人類は眞に共存し共樂することが可能である。

ある反對者はかう云ふかも知れない。勞働は如何なる時代に於いても苦痛であり回

避されるに違ひないと。が、それは現代の労働組織に對する先入観を土臺にした杞憂に過ぎない。

労働が萬人に共通する社會的義務であり、その労働によつて生産された社會的幸福を各人が平等に共樂することが出来る。新らしい時代の労働は本當に神聖な人間の活動になることは決して想像に難くない。

伊勢神宮の御木引きの習慣を見よ、それは立派に労働の神聖を歓迎される時代の可能を立證するものではないか。

□、人は各々其の能力に應じて労働を分擔す

今日一般に労働と云へば、職工とか百姓とか、女工とか鑛夫とか車夫とか、土方とかいふ筋肉的の力業のみをさして言つてゐる。けれどもこれは決して正確な見方ではない。

苟も社會的の必要を充すべき凡ての働きは一樣に労働といふ言葉をもつて總括さるべきであつて、政治家や資本家の仕事は遊戯であつて、車夫や土方の仕事のみが労働であるといふ筈はない。其の事が社會的に必要なものであり、有意義なものである限り、凡ては一樣に社會的労働として神聖である。従つて先に共存共樂主義の基本が労働の社會的義務にあると言つたがそれは決して凡てのものが百姓になり凡てのものが、鑛夫にならなければならぬといふことでは勿論ない。

人間には生れながらにして先天的な差別がある。智識に於いて、體力に於いて各人の各様の能力の相違があり其の能力を無視して凡てを平等にしようとすることは天地自然の理法にもとる謬想である。

そこで、共存共樂の社會に於ける労働の義務は、人各其の能力に應じてこれを分擔するのであつて、官吏もあれば社員もある、職工もあれば百姓もあつて、今日の

分業組織と同様である。

しかし其の分業の標準はあくまでも、各自の能力であつて、今日の社會の如く、門閥や財閥や官僚といふ傳統的な特權をもつて親の門地財産によつて其の分にあらざるものも社會の爲めに何事もせず特殊な地位に安逸をひさばるといふやうなことは、全く廢止されなければならぬ。

又凡ての勞働が社會共同の必要を分擔するものである限り職業に貴賤尊卑のないことは明白であつて、これに對する報酬も完全に同一の標準によつて決定されなければならぬ。

かくの如く各人が其の能力に應じて、自由に適所を選んで其の天分を發揮し、貴賤尊卑の區別なく平等の社會的標準を以つて待遇されることによつて、勞働の義務は完全に確保され勞働の神聖が名實共に人間生活の指導原理となるのであらう。

#### ハ、各人は相互に共存を保證す

既に勞働の神聖が各人の社會生活を支配し凡ての人間に勞働の義務が課せられた以上、人は其の社會に生存するの權利がなければならぬ。

今の社會は、凡ての人が働かうが、怠けやうが、その事が積極的に社會の秩序を害せぬ限り何等の干渉をしない。従つてまた、各人の生活に就いても食へようと食へまいと全く社會はこれに就いて何等の責任を負はないのである。

そこで、生れながらにして親の財産を相續して一生何等の勞働もなさず勝手氣儘な生活を送つてゐるものがあるかと思ふと、親から譲り受けたものは、身體だけであつて、二六時中勞働して尙ほ食ふことの出来ない貧乏人が出來た。しかしその孰れたりとも社會は何等の積極的責任を有しないのである。

言ひかへれば、現代の社會は凡ての人々に向つて社會的勞働の義務を要求しない代

り社會は社會人の共存に關して積極的の保證を與へない。これが現代社會の仕組であつて、現代社會が共存の原理の上に仕組まれてゐないことは明白である。

しかし社會が、凡ての人々の共同の勞働の上に立てかへられた以上、社會は其のよつて立つ所の各人の勞働に酬ゆるに各人の生存の權利を保證することを以つてしなければならぬことは當然である。

社會は勞働の義務を課すると共に人々をして勞働の機會を保證しなければならぬ。失業者の存在は明かに社會の責任であり、失業者の生活は社會の共同の臺所によつて保證さるべきである。

それはあだかも一家の經濟に於ける家族の如く各人は其の能力に應じて分相應の勞働をなすと共に其の生活は家族相互によつて保證されると同様である。即ち共存共樂の社會とは我が國傳來の家族制度の美風を社會にまで擴張したものであつて共存共樂社會の原型は我が家族制度にあるといふことが出来る。

## 二、各人は其必要に應じて共樂す

かやうにして、眞の社會的協同は偉大なる富を生産するに相違ない。此の社會的協同は、其の富の分配について如何にして公平を維持するか。家族は、各其の能力に應じて勞働した。従つて其の富の分配に於ける權利に於いても各々大小の區別がある。

しかし家族は其の富の消費に於いて決して各自の權利を主張して爭奪はしない。彼等は各々の必要を標準にして圓滿に其の共同の富を分配し共樂してゐるではないか。

此の家族生活の美風は同時に共存共樂の社會に於ける分配の指導原理でなければならぬのである。

各人はその能力に應じて最善の勞働を盡し、其の分配に於いては各人の必要を標準にして各々謙讓の美德を守ることが必要なのである。



太陽が萬物に向つて熱と光を與へて生成化育ならしめ、その受くるものゝ力(必要)に應じて恵み給ふが如く、社會は萬人の必要に應じて其の生活を保證しなければならぬ。

共同の勞働は共存と共樂の母である。

勞働の義務は生存の權利を保證する。

これが共存 共樂主義の眞髓である。

(1) 反動思想か、改革思想か

私は前二章に於いて、不充分ながら共存共樂主義の綱領の説明を了へた。前途の解説によつて自から明白にされた通り、共存共樂主義は、現代の利己主義的社會組織の缺陷と不合理を指適し、其の改革を要求する一個の改造原理である。

現代の社會は、餘りに無節制なる利己主義的組織に禍されて、政治的征服と經濟

的享樂を追求するあさましき大小の盲者達によつて蹂躪されつゝあるのである。

現代の社會は、社會人の共存共樂を保證する爲めに、社會といふ名稱に價する程の統制をも備へてゐない。勞働は神聖どころか、全く一個の商品と化して、稼ぐに追ひ付く不思議な「貧乏」が、影の形に従ふ如く勞働者につきまとつてゐるのが今の世の有様である。

此の非社會的社會組織即ち個人主義的、非國家的社會組織が産み出したものは、物質萬能の頽廢的な成金文化と、その土臺に人柱の如くうづもれた幾十萬の貧乏人とである。

明治大正の燦爛たる物質文明も畢竟するに七千萬國民の爲めに共樂することを許されてはゐない。私は此の成金文明の裏面に一日の糧に呻吟してゐる「除外された同胞」の慘めな存在を見逃すことは出来ない。現代の社會と其の文明は、大多數同胞に向つてその社會的共存をぢやかし、その文明の共樂を拒んでゐることは、おほへ

からざる現實である。かくて社會の富と享樂は全く一部の少數者に壟斷されてゐる。而かもそれが現代の社會組織それ自身の産み出したものであるとすれば、現代の社會は、社會人の共存共樂を保證すべくも無き無能力者であることを明白に告白するものに外ならないのである。

まさに現代の社會は改造されなければならぬ。

私は多くの改造思想と改造論者の活動は、此の社會的必要の反射である貧乏と迫害の裡に一個の理想をかゝげて主義に殉せんとする改造運動者に對して深甚の敬意を表すると同時に、此の社會の實狀に目を閉じ耳をおほふて、私かに一日の安慰を盗み、『此の世をば我が世とぞ思ふ』現狀満足の人達は利己主義的墮落者であることを斷言するに躊躇しない。

私は、此の利己的暗闘に墮落した社會の現狀を直視し、はるかに皇祖建國の世界的大理想を回想する時に、社會的正義と人道の確立の爲めに改造を叫ばざるを得な

い。即ち社會的義憤を感じるものである。

私は皇祖建國の大精神を共存共樂主義の名に於いて實現せんとする一個の改造論者である。

多くの既成宗教は、キリスト教も佛教も其の教義の創成の當初に於いては、燃ゆるが如き人道的熱情をもつて社會的諸惡と戦つた。それは眞に宗教の名に價する存在の價値と意義とを有するものであつた。が、それ等の諸宗教も相互の排斥と征服の爲めに終に墮落した即ち、彼等は、キリスト教と言はず、佛教と言はず、以下怪宗邪教は言ふまでもなく、時代の權勢に媚び、當時の權門勢家と相提携して彼等の勢力擴張に没頭したのである。又時代の富者は現實の享樂を永劫にまで確保し延長せんとする欲求から多くの財物を彼等の殿堂に捧げること惜しまなかつた。かくて宗教と權門の結合は、宗教をして全く保守的な反動的な、現狀擁護の魔酔劑らしめたのである。

現代の宗教は悉く現實の社會苦の救済を未來の天國と極樂に於いて求めんことを説かないものはない。佛教と云はずキリスト教と云はず、凡ての既成宗教は、現實の社會的缺陷と其の社會に苦勞する人々の現實的社會苦を未來の天國によつてあがなはんことを説く而して彼等は、空腹の貧乏人に向つて尙未來の極樂の爲めに所謂貧者の一燈をせしめようとしてゐるのだ。彼等の説教は要するにアキラメであり逃避である。即ち、凡ての社會苦を運命として忍從せしめようとするに於いて一切の既成宗教は、時代擁護の魔酔劑に外ならぬ。

「宗教は阿片なり」とは社會主義の放言するところであるが、恐らく現實に覺めたる何人も之を否定するものはあるまいと私は思ふ。私は過去數十年來勇敢に既成諸宗教と挑戦して來たそれは要するに今日の宗教徒どもらが何等の社會的價値を有せざるのみならず、明白に社會的進歩の上に一般の所謂善男善女をして魔酔せしめようとする阿片以上に強力な障害的勢力であるからである。

此所に於いて眞人道とその眞髓たる共存共樂主義が、決して既成諸宗教や宗教家によつて組織された各種の所謂思想善導團體の如く消極的な退嬰的な反改革的思想でないことが明白にされるのである。即ち共存共樂主義は赤化防止の思想的背景でもなければ、純正普選など、稱する誤まれる國體擁護の思想的根據では勿論ない。それは飽までも現狀打破の積極的な改造の大原理であることを宣言してはばからないのである。

以上の説明によつて共存共樂主義は、世の所謂反動思想に分類せらるべき類のものでないことは明白となつた。そこで次に起る問題は、然らば共存共樂主義は、無政府主義、共產主義以下の所謂危険思想と如何なる關係に立つものであるかといふ問題でなければならぬ。それは當然の疑問である私の最も責任ある解答を必要とする問題である。然し共存共樂主義は果して無政府主義、共產主義と如何なる關係に立つか？

彼我共に現状打破の叫びだ、社會の改造を要求するものとすれば或ひは共同の關係に立つものではないかといふ疑問も一應は最もであるが、そう簡單に行くなれば、今日そこらの識者と呼ぶ御多忙な御仁をして思想善導などと世話をやかすような所謂思想界の混亂は起らない。

社會運動の大勢に就いて多少の正確な觀察と注意を拂ふ人々には同じ社會主義の名をもつて一括されるものゝ内部にも、不斷にその思想傾向に於ける排撃、衝突の繰返されてゐる事實、特に共產主義と無政府主義の間には全く相入れざる鬭争の行はれてゐる事實を發見されるであらう如く、我が共存共樂主義はこれ等の諸思想に對して發生的に、勿論、その標榜する理想に於いても其の實現の手段に於いても、全く相反する独自の立場を固守するものである。

## (2) 共存共樂主義と共產主義との差異

私は以下、共存共樂主義の實際政策をかゝげるに先だつて、此の重大なる問題に就いて答へようと思ふ。

先づ無政府主義に就いて述べることが順序であるが、今日我が社會運動上に於ける無政府主義の勢力は、甚だ微々たるものであつて、所謂西洋思想の中毒から自覺しつつある現今の社會運動者や労働者の間には、此の一片の空理空論を本氣で信ずる狂態的傾向は全く認められないと言つても過言ではない。

甘糟が大杉を殺害した行動の是非は別として、彼の殺意が、無政府主義の勢力を過信した又従つて大杉の生死に重大を過信することによつて決定されたものであつてそれは明白な社會運動の大勢に對する無知識から來た大きな錯誤であつたことは、今日その孰れに好意をよするものにとつても共通する觀察である。

大杉が一個の惡魔的夢想家であつた如く彼の信奉せる無政府主義も一片の惡魔的夢想であつて、天に太陽があつて天體の中心を統べるが如く人間の集團生活が何等かの

中心なくして成立し得ざることは三歳の童兒にも明白なことであり、今更異同を論ずるに値せぬことは讀者諸君の直ちに了解の行く所であると信ずるが故に此所には之を省略する。

そこで今日各種の革命思想の中で、最も恐る可き勢力を以つて、無産階級の間に浸透してゐるものは、社會主義思想なかんづく共產主義であるから私は次に共產主義に對する共存共樂主義の異同を明にしよう。

しかし共產主義の思想内容に立ち入つて其の是非を批判し、彼我の異同を究明することは甚だ繁雜なることでもあり又個々の政策については次號に於いて共存共樂主義の實際政策を解説することによつて自から明白にされることでもあるから、此所では専ら兩者の思想的根據に横はる最も根本的な差異を指適することに止めて置く。

イ、日本主義と外來思想

共存共樂主義は、既に述べた所に明かである通り、皇祖建國の理想と體制に出發するものであつて、我が固有の國土に發生し、我が固有の民族精神によつて成長した五千年來の國民的社會理想である。

我が建國當時の社會が協力労働の基礎の上に立つた共存共樂の社會であつて、我が上代人の社會生活は諸外國の歴史に見るが如き醜い利害の暗闘や民族的偏見の争闘もなく、現實の幸福を共樂した平和な生活であつたことは、今日古代日本の研究者の等しく認める所であるのみならず、我が國史の發展の跡を見るのに、大化の改新と云ひ明治維新と云ひ、皆な此の建國の理想たる共存共樂主義への發展にあらざるものはない。

國史上に現はれた社會改革の成敗は複雑な原因によるものではあるが、その成功せると失敗せるとに拘らず、常に共存共樂主義の理想に向つて試みられたことは大化の改新に於ける斑田收授の實行による當時の基本的財産たる土地所有の上に、平等の

原則を確立せるが如き、又一般庶民の救済の目的に於いて所謂徳政を實行して一切富豪階級の横暴を強制せるが如く又近くは、徳川時代に於ける水戸藩の私有財産の制限の實行、明治維新に於ける藩籍の沒收の如きは一として此の理想に向つての改革でないものはない。

かくの如く五千數百年の間我が國民性の上に、その指導的目標として發達して來た共存共樂主義が當面する社會的轉換期に當つて、來るべき新文明、新社會の基礎たるべきことは、何人にも異論のない所であると私は信ずる。

凡ての事物はその發生の當初に於いて不充分ながら最も露骨な型態をもつて現はれるものである。それが今日吾々が上代日本の社會的體制に貴重なる意義と生命を發見し、將來の指導原理を之に求めんとする所以である。

此の意味に於いて我が共存共樂主義は最も古き日本主義であると共に又最も將來に富む新らしき日本主義であると言ふことが出来る。

然るに共產主義は今日すべての人々の知る通り、獨逸や英國の社會狀態からカール・マルクスによつて發見された外來の思想であつて、元より其の説く所には大いに聞くに値する世界共通の眞理もあるであらうが、日本の社會に發生し日本の國民性によつて陶冶されたものでないことは、我國家社會の改造原理として、共存共樂主義と根本的に區別される發生的異差の一つである。

私は兩者に就いて我田引水的な是非の抗辯をさけ務めて其の區別さるべき點を明白に指摘し、その孰れをとるべきかは廣く讀者の公平にして冷靜なる判斷によりたいと考へる。

何んとなれば、私は決して偏狹なる日本主義者でもなく、又外來思想なるが故に、直ちに危険思想であるとして排斥しなければならぬといふような、爲めにする目的を以つて共存共樂主義を唱導するものでないからである。

## 口、精神主義と物質主義

次に共存共樂主義は他の多くの宗教的教化團體と其の態度を異にするものである。單なる社會制度の變革のみによつて、而かもその暴力的改造によつて人類社會の諸惡を一掃し萬人の爲めに幸福なる共樂の社會が創造され得るとは信じない。假りに一時の暴力的革命によつて、亦は一片の法律の強制によつて、共產主義の理想を實行したところが、凡ての社會人が從來の利己的慾望に代るに崇高なる勞動の義務的觀念によつて、精神的改造が行はれてゐなかつたならば、社會の眞の更新は全く不可能であると考へるものである。

そのことは、迅雷の如き暴力的手段と獨裁的權力を以つて行はれたロシア革命が地上の樂園を容易に實現せられなかつた事實を以てしても明かにされてゐるではないか。

即ち共存共樂主義は精神的教化を基礎として社會制度の改造を要求し物質的社會環境の向上を計畫することに於いて唯物主義と相入れざる精神主義である。然るに共產主義の根本的哲學はマルクスの所謂唯物史觀であつて其の主張する所によれば、社會的變革の根本的原因を物質的變革に歸し、人間の精神的活動は要するにその物質的變化の反映に過ぎないといふのである。従つて社會人心の教化の如きは物質的環境の向上なしには、痴人の夢であるといふ唯物的改進黨論に達するのである。そこで共產主義者は「力の革命」を力説し、社會制度の急激なる變革を計畫し、獨裁的權力の強制によつて社會の更生を強行しようとするのである。

その孰れが正當にして妥當な態度であるかは別として、此の思想的立脚地には兩者は全く相反する立場にあることが明白である。特に吾々は近代の物質文明は人をして機械の奴隸たらしむることによつて墮落したことに注意しなければならぬ。

來るべき新文明は人間をして機械の奴隸から解放するものでなければならぬ。即ち

人間が自由に平等に機械を行使し物質を支配する新たな文明社會への改造が依然として物質によるか精神によるかは讀者の判断に訴へたいと考へる。

#### ハ、國家に對する態度の相異

更らに共存共樂主義は國家に對する態度に於いて共產主義と全く區別される。

吾々は先に神風純愛教の信條の第二條に『我等は教主天照皇大神の豫言の如く天に一つの太陽ありて萬物を總べ玉ふが如く、地にも亦一つの國王の顯はれて總べての國を治め給ふに至る事を信ず』と宣言し、而かも註に於いて『天照皇大神の御豫言の旨意は、アレキサンドルやシーザや、ナポレオンなどの理想とした征服的帝國主義の世界統一ではありません、ただ純愛の徳によつて太陽の自然と萬物を生育するやうに此の世界に純愛を行ふものによりて、世界は一つの共同生活體に建設されなければならぬと云ふのであります、しかもそれはいづれの國民によつて指導されても何等問ふと

ころではないといふ御主旨であります』と述べてあることによつても明白な通り吾々共存共樂主義者は決して今日云ふ所の偏狹にして侵略的な國家主義を是認するものではない。のみならず寧ろ理想に於いては全世界の上にインターナショナルの實行を希望してやまぬものであるにも拘らず、等しく此のインターナショナルを高唱する共產主義者と共に其の國家に對する態度を全く異にするものである。

吾々は人類の生活が國家生活の範圍に止まる今日の狀態に於いては、國家は永久に萬能のものでないまでも最善の生活狀態であつて國家は凡ての階級闘争を超越した國民共同の利害を代表する組織でなければならぬと信じてゐる。

勿論今日の國家の實際政治上の態度には、必らずしも此の見解は當つてゐない。けれどもそれは國家の本質的狀態ではなくて、時代の政治家、資本家の横暴に禍された結果であると思ふべきでない。即ち國家を本來の體制に復歸せしむることによつて國家は社會的改造の上に有力な任務を果すことが出来るのである。だから吾々は吾



々の物質的生活の改善も精神的生活の尙上も國家の更生にまつ所が大である。然るに共產主義の國家觀によれば、國家は元々社會階級の闘争の結果として、階級が被征服階級を強制する爲めの組織的暴力であると云ふのである。そこで此の國家觀は當然に彼等の征服階級への争闘に於いて國家の破壊を要求する危険思想たらざるを得ない。此國家觀の相異は兩者の最も相容れざるものといふことが出来る。

## 二、義務中心と權利中心

共存 共樂主義は、その理想社會の建設を協同労働の義務の上に置くものであることは既に述べた。共同の労働は共存 共樂の母であり、労働の義務は生存の權利を保證すると云つた。言ひかへれば労働の義務の履行即ち「一日なさざれば一日食はず」といふ崇高なる社會的義務の精神が共存 共樂の根本精神であると云ふのである。然るに共產主義を初めこれに類する社會主義思想は、皆な個人的權利の主張を基礎

として社會の改造を要求し、自由、平等の權利と實現と生存權の確立を要求するが其の基本たるべき社會的労働の義務に對する自覺を喚起しようとはしない。彼等は權利の要求に急にして義務の履行に社會的意義を認めない。これまた兩者の根本的差異である。

其の他宗教に對する見解に於いても吾々は所謂未來教と稱せられる天國教、極樂教を否定することに於いては共產主義者の云ふ所にある點の一致を發見するものであるが、祖先を崇拜し、國家社會の功勞者の靈を祭り、これを永久に祀らんとする敬神の思想が、若し共產主義の物質主義的立場から排斥されるものとすれば、此所にも又大きな區別が立てられる譯である。しかし、ロシアに於けるレニンの神格化されつゝある状態までを見るのに、恐らくは彼等の物質主義も決してかくの如き點にまで擴張せらるべきものではないらしい。

共存 共樂主義は「人は働きて食へべきものなり」或は「一日なさざれば一日食はず」

といふことに對して共產主義は「働かざるものは食ふべからず」といふ。

其の言や甚だ相似たるが如くにして、前者が自制的であり、精神主義的であるのに反して後者はあくまでも強制的、制度的である點なども兩者が似て非なることの甚しきものであることを證する一端とも云ふことが出来よう。

(3) 共存共榮其の他の流行語に就て

近來「共存共榮」といふ文字が新聞や雑誌等に盛んに流行してゐるようである。それはあたかも一個の主義政策を表示するものゝ如く世間一般が認めてゐるよう考へられぬでもない。

しかし、私は未だ不幸にして此の新らしい流行語が如何なる内容を有するものであるか、又た如何なる社會の狀態に組織を以つて所謂「共存共榮」なりと稱するものであるかに就いて何人の説明にも接しない。勿論誰れが如何なる内容に於いて如何な

る社會の狀態に組織を以つて所謂「共存共榮」なりと稱するものであるかに就いて何人の説明にも接しない。勿論誰れが如何なる内容に於いて如何なる主義を立てようとも自由であるが、私は共存共榮主義が、かくの如き其内容の流行語と同一視されることを迷惑なことであると考へるのである。

一例を擧ぐるならば、今日程、「我が國體の精華を發揮し云々」の言葉が流行といふよりは亂用されてゐる時代はあるまい。が、それ等の亂用者の中に幾人かよく「國體の精華」を眞に擱んでゐるものがあるか疑はしいと同様に「共存共榮」といふ言葉も、時候の挨拶程の意義もない空虚なものではないかと思はれる。

私は以上の論述に依つて共存共榮主義の独自の立場が明かにされたことを信ずる。日本の改造は日本自體の中心なる指導原理を見せなければならぬ。而して我が共存共榮主義こそ此の重大なる使命を果し得る唯一の眞理であることを斷言してはゝかない。

全體共存共榮と云ふことは、ドンナ事を云ふものであるか、全世界の人々が同じ様な財産を所有し同じ様な家屋に住居し同じ様な生活をして暮して居やうと云ふことであるのか、その共に榮へて共に存すると云ふことの眞の意味が少しも私には了解が出来ないのである、人は各々其の目的と樂しみはその面の相違して居る如く相違して居るものであつて甲の樂しみは乙の樂しみではない乙の樂しみは必ずしも丙の樂しみではない孔子の弟子の顔回の如く一つの瓢の酒を飲んで樂んで居る者もあれば數萬の富を所有していても尙不足と云つて居るものもある、これ等の人々を共に榮へさせると云ふことは實に不合理的な笑ふべき説ではあるまいか。

生れながらにして人間には先天的に體力智識に差別があるとしたら各々其の樂しみにも差別がなければならぬ筈である、これ共存共榮主義と、共存共榮主義と大にその主義を異にする所である。

大正拾四年十一月十五日印刷  
大正拾四年十一月十七日發行

定價金參拾錢

發行者

東京市小石川區小日向臺町三ノ四三  
大 鳥 齋 鈴

發行所

東京市小石川區小日向臺町三ノ四三  
神 風 會 出 版 部  
振替口座七〇三九三番

印刷所

東京市小石川區小日向臺町三ノ四三  
八 洲 舍  
電話牛込(一六六一)

296

494

終

